

# GISにもとづく佐賀平野における

## 縄文～弥生時代の遺跡分布

藤尾慎一郎

国立歴史民俗博物館

### はじめに

佐賀平野は、東を筑後川、西を嘉瀬川によって挟まれた範囲の面積約700km<sup>2</sup>の面積をもつ平野である。嘉瀬川と六角川によって挟まれた白石平野を含めて佐賀平野と呼ばれることもある。縄文人や弥生人たちがこの平野に住み始めたのは縄文前期からであるが、当時の佐賀平野は現在の面積に比べるとかなり狭かったと考えられる。もともと、現在の長崎本線より南側は海であったことが予想されているのに加え、縄文海進の影響もあって、海がかなり入り込んでいたからである。さらに佐賀平野の南に広がる有明海は干満の比高差が6mにも達していることも、遺跡立地に大きな影響を与えている。

佐賀平野における考古学の調査が本格化したのは、1970年代後半以降の、九州横断自動車道の建設に伴う事前調査や、工業団地建設に伴う事前調査を契機とする。支石墓の丸ごと移築で有名になった久保泉丸山遺跡、九州で初めて見つかった大型環濠集落である吉野ヶ里遺跡など枚挙にいとまがない。

今回、GISの元データとなったのは、1987年に文部省科学研究費奨励研究A「西日本における水稻耕作受容期の研究」で集めたものである。したがって20年近くたった今日とは遺跡数や分布にかなりの隔りがあることも予想されるが、遺跡立地の基本に変化はないと思われるので、GISの解析結果にもとづいて気づいたことを列挙してみたい。なお、GISデータの作成に関する詳細は中央大学大学院の山口欧志氏のレポートを参照されたい。

### 1 遺跡分布 (図1)

図1は、縄文晩期、弥生前期・中期・後期の遺跡分布である。ここには弥生早期の分布がないが、1987年当時、筆者は弥生早期説を認めていなかったため、縄文晩期のところを含めている。佐賀平野の遺跡は、平野の中央に立地する遺跡と、平野と山地の境界付近(図中の肌色部分)に立地する遺跡の二つに分かれている。特に後者は、境界部に沿って東から西へ遺跡が連続していることが見て取れるが、これは、九州横断自動車道建設に伴う発掘調査に伴って見つかった遺跡なので、単に高速道路のルートと一致してみえていることもあるのだが、境界部に実際に遺跡が営まれていることもまた事実なのである。

まず晩期(弥生早期)に、神埼郡香田支石墓や佐賀市久保泉丸山遺跡、大和町

礫石遺跡などの墳墓遺跡が境界付近に作られる。これらの墓を営んだ集落はまだ見つかっていないが、地形からみて全面に広がる台地上に存在していたことが予想される。また千代田町などラグーン地帯には、上黒井貝塚や託田西分貝塚などの汽水性貝塚が分布する。

弥生前期になると、平野部に遺跡が急増し、灌漑式水田稲作に本格的に取り組み始めた集団の出現を物語っている。集中するのは田手川に沿った平野部である。吉野ヶ里遺跡に最初の環濠集落である田手二本黒木遺跡が現れるのは前期中葉の板付Ⅱ a 式併行期で、以後、弥生終末期まで地点を変えながら吉野ヶ里丘陵全体に遺跡が拡大していくことがわかっている。千代田町では晩期以来の貝塚群が継続している。境界部には佐賀市大門西遺跡のような集落遺跡も出現する。小城・三日月町の平野部には土生遺跡のような後期無文土器を大量に出土し、青銅器製作に携わっていたことが予想される集団が現れる。また武雄に潮見遺跡のような弥生集落が現れるのもこの頃である。

これらの前期遺跡のルートだが、福岡から二日市を通過して南下したととらえるよりも、唐津から多久、もしくは糸島からの山越えルート（現在の国道273号線）、極端な話、有明海沿岸沿いに入ってきた可能性も地元では検討されている。島原半島や諫早にみられる支石墓の分布をふまえたものである。

中期になると、前期に遺跡がみられたあたりの遺跡密度が増す。吉野ヶ里丘陵では、長さが1 kmを超えるような列状埋葬を行った中期前葉＝汲田式の甕棺墓地が北の方に営まれたり、託田西分遺跡では、甕棺共同墓地も作られるようになり、渡来系弥生人の墓であることがわかっている。

後期は基本的に中期の延長線上にあるが、筑後川の河口付近にも遺跡が現れるなど、河川海運を考える上である種の機能を果たした集団の存在がうかがえる。

## 2 密度分布（図2）

図2は遺跡の密度分布を示したものである。時期設定は分布図と同じである。晩期（弥生早期）に密度分布が高いのは、大和町礫石遺跡付近である。基本的に墳墓遺跡だが、集落遺跡を含めると、密集度は高い。先述した弥生文化の拡散ルートを考えると、糸島からの山越えルートで来ると、最初に平野に出る地域が大和町なので、佐賀平野最初の遺跡密度が高い地域と一致しているのは、偶然とは考えられない。

弥生前期になると、大和町付近に加えて、吉野ヶ里丘陵から千代田町にかけての田手川流域を含む地域、唐津市宇木川流域の汲田遺跡や柏崎遺跡を中心とする地域、鳥栖市安永田遺跡を中心とする4つの地域に高密度分布をみることができる。とくに唐津平野は、最古の水田が見つかった菜畑遺跡が海のすぐそばにあったのに対し、宇木川流域は丘陵に向かって奥行きのある平野をもっているため、のちの末廬国の中心地域へとになっていく地域である。2000年にはいると、汲田遺跡の数km北



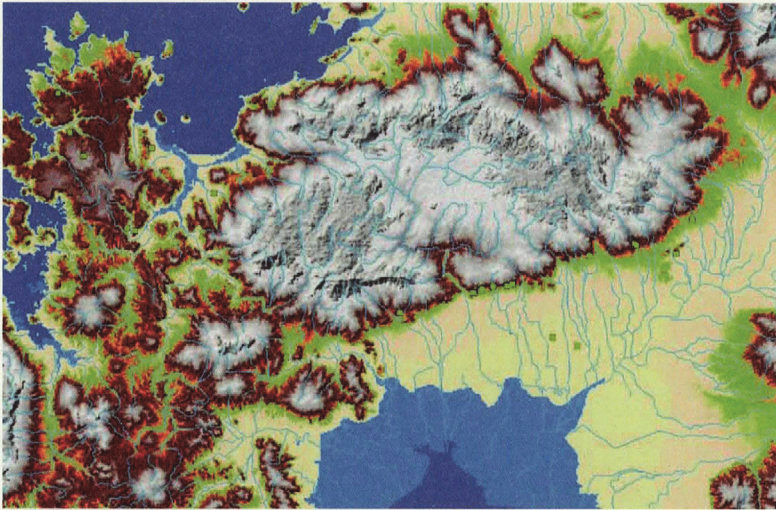


図 1-1 遺跡分布  
(弥生早期)

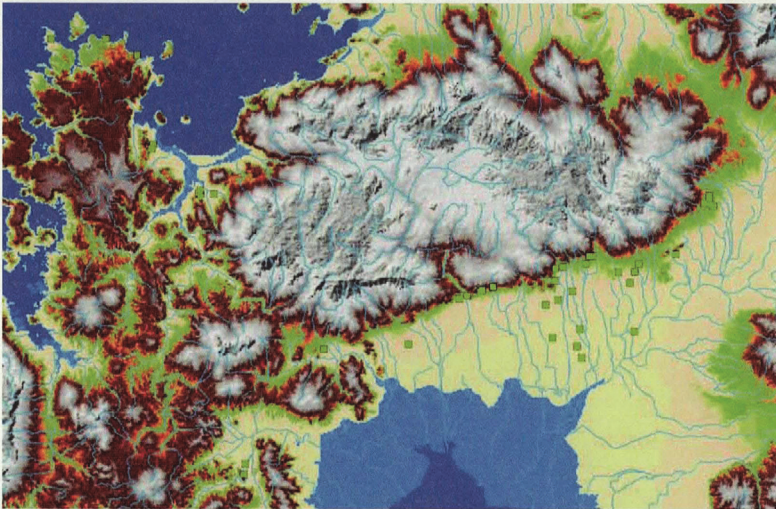


図 1-2 遺跡分布  
(弥生前期)

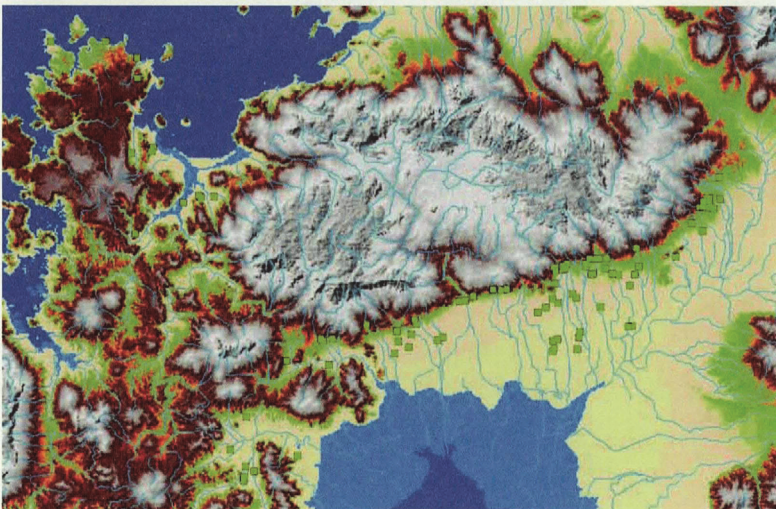


図 1-3 遺跡分布  
(弥生中期)



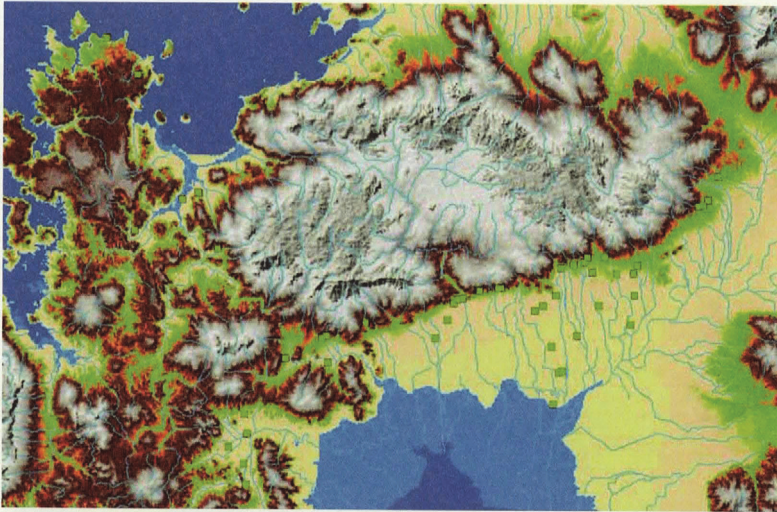


图 1-4 遺跡分布  
(弥生後期)

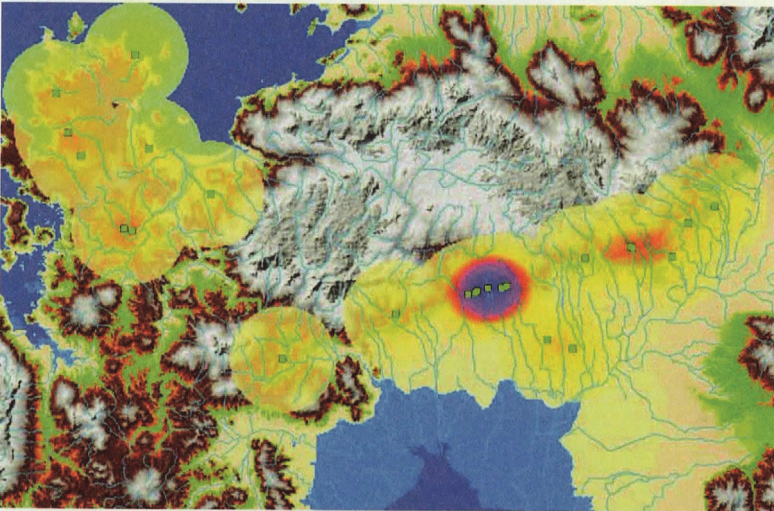


图 2-1 密度分布  
(弥生早期)

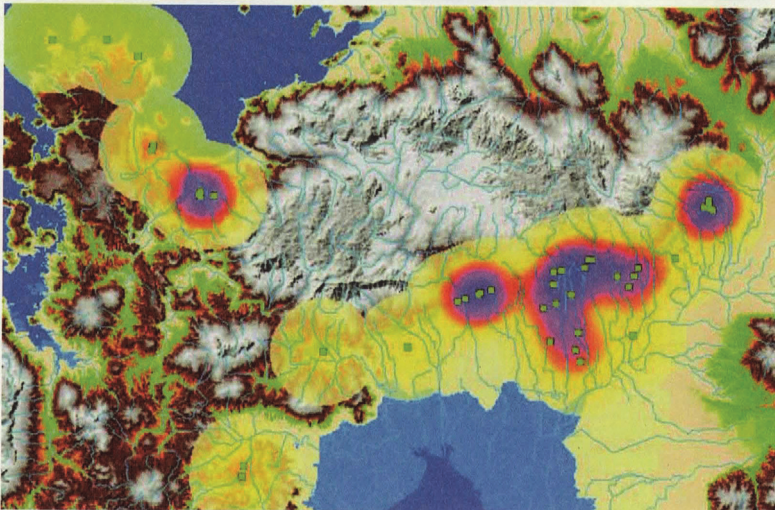


图 2-2 密度分布  
(弥生前期)



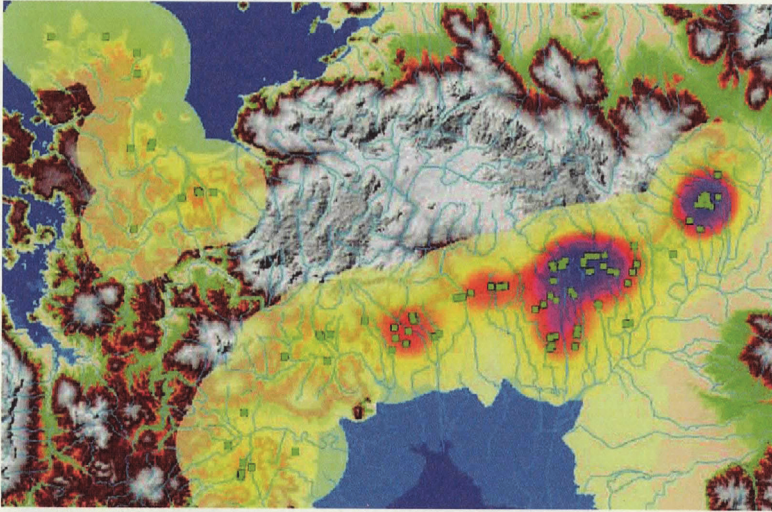


図 2-3 密度分布  
(弥生中期)

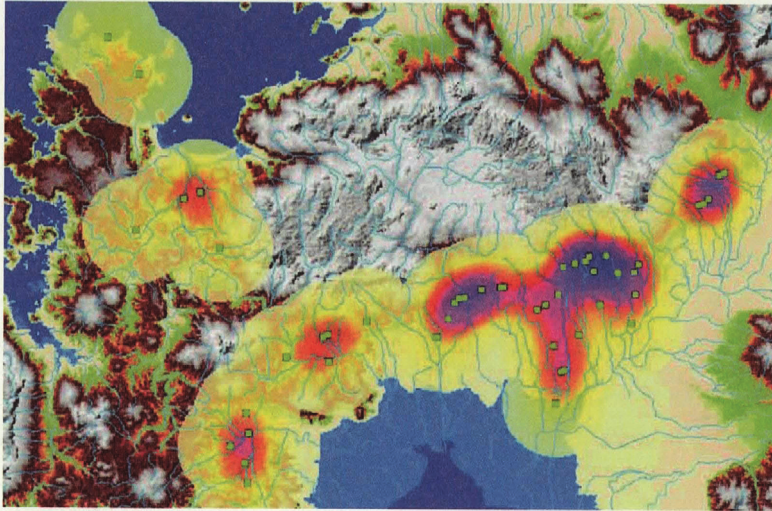


図 2-4 密度分布  
(弥生後期)

から梅白遺跡がみつきり、水田跡も見つかっているところから、菜畑遺跡におとらず弥生早期から水田が営まれていたことが新たに確認されている。梅白遺跡は、国立歴史民俗博物館の年代測定グループが2003年5月に、弥生時代の始まりが500年さかのぼるといふ発表を行ったときのデータのの一つである。

前期末から中期にはいると、遺跡分布のところで述べたように小城・三日月地域で青銅器生産が始まる土生遺跡周辺の密度分布が高まるとともに、武雄地域で成人甕棺が初めて出現する。同じく鳥栖地域の安永田遺跡を中心とする地域でも青銅器生産が始まっている。唐津地域では、梅白遺跡の西、松浦川の河岸に中原遺跡群の一角をなす甕棺墓が新たに発見されているので、図上ではそれほど密度分布が高くないが、末廬国の中心地域と考えられるだけの密度分布をもっていたと考えられる。

後期の遺跡密度分布は中期とそれほど変わらないが、武雄や小城・三日月、唐



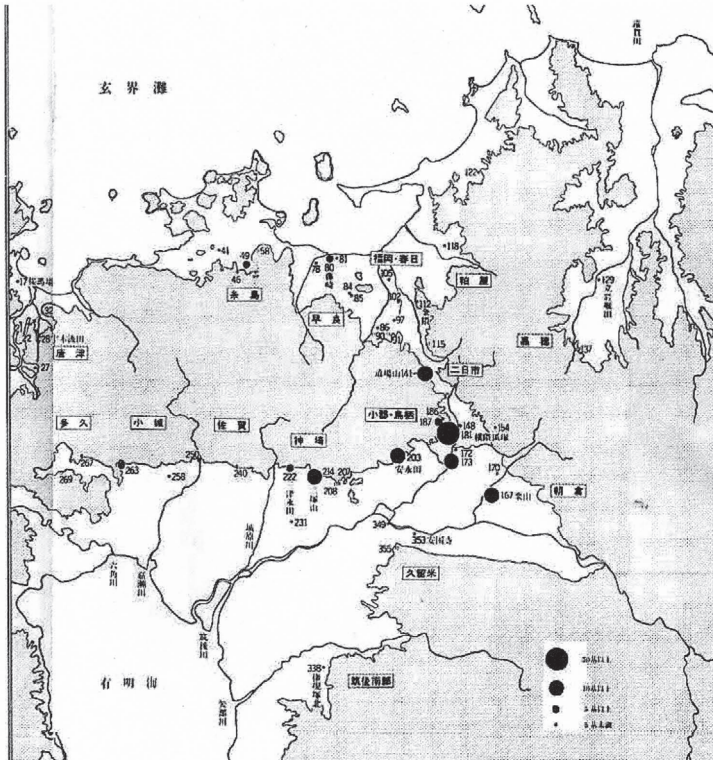


図3 大型成人カメ棺出土遺跡分布 (中期末～後期中頃)

津で密度分布の割合があがるのは、福岡地域で糸島をのぞいて甕棺墓が衰退するのは対照的に、甕棺墓が盛行することと関係しているものと考えられる。

密度分布をみて思い出されるのが、筆者が17年前にまとめた九州北部成人甕棺分布圏との共通性である(「九州の甕棺」国立歴史民俗博物館研究報告21,1989)。使っている遺跡がかなり重複しているから当然といえば当然だが、甕棺分布圏の線引きを遺跡分布の外側を地形に合わせておこなった点が今回と異なっている。

有明海沿岸地域で成人甕棺葬が盛行する弥生中期末(立岩式新)～後期(三津永田式)を例に甕棺分布圏と比較してみよう。

この時期、中期において甕棺墓の規模、副葬品の量と質において頂点をきわめた福岡・春日、神埼、朝倉で甕棺墓自体が衰退し、三津永田式段階までに甕棺以外の墓制へと転換現象が進む。そのかわり九州北部の成人甕棺の中心地が小郡・鳥栖、神埼、二日市、朝倉などの内陸部に移る。また武雄では1～2基の小規模ながら大型甕棺が初めて出現する。

中期末～後期中頃における有明海沿岸地域の大型成人甕棺の基数は、1988年の段階で、小郡・鳥栖地域が151基でダントツでもっとも多い。ついで神埼の33基、小城5、武雄4、多久2、佐賀1となっている。ちなみに奴国の中心地では27基、伊都国では10、不弥国では3基で、有明海沿岸地域の多さが目立つ。これは中期的



な共同墓地が有明海沿岸地域に多いことを示すのであって、決してこの地域が玄界灘沿岸地域に比べて社会的に進んでいることを示すものではない。

### 3 コスト距離 (図4)

図4は1時間で移動できる距離圏の面積を、コスト距離として表現したものである。時期はバラバラで、赤い色のドットは縄文晩期のみ、緑色のドットは、晩期から弥生前期の主要遺跡、白色のドットは中期・後期の遺跡である。

弥生早期に現れるのが、三日月町の石木中高遺跡である。平野のど真ん中にあるため、コスト距離をほぼ円状に描くことができる。この遺跡は晩期末黒川式と弥生早期突帯文土器が一緒に出てくる遺跡で、現在は水田の下になっているが、出土遺物から本格的な水田稲作を行っていたとは考えにくいことから、園耕段階にあった農耕民の遺跡ではないかと考えている。それに対して菜畑や宇木汲田遺跡は水田稲作民で、背後に山塊を控えているところから、コスト距離はそれほど低くないと考えられる。平野との境界付近に立地する礫石A遺跡、大門西遺跡、丸山遺跡、四本黒木遺跡も背後が山塊なので同様にコスト距離は低くない。吉野ヶ里遺跡は、丘陵上にあり、遮るものは何もないところから、コスト距離は有効である。これは図4の物見槽上から見渡せる範囲の図からも確認できる。後期の千塔山遺跡は、西に山塊を控えているところから、東の宝満川に向かって1時間コスト距離圏をもっている。

### 4 おわりに

今から17年前に九州の甕棺分布図を作成したときは、遺跡の緯度・経度など測ることもなく、2万5千分の一の地形図に落とした遺跡を九州北部、そして九州全体の地図に何度も落としながらの作業に膨大な時間を要した。9年前に日本全国の弥生石器分布図を作った際には、緯度・経度のデータだけは外注して作っているが、生かし切れずに次の出番を待っている。

それが現在では汎用ソフトを使うことで一瞬のうちにビジュアルな分布図や密度分布図、コスト距離などさまざまな図を作ることが可能になった。1点1点、レタリングを使って遺跡を落としていきながら、できあがっていく図の意味を考古学的に解釈することも楽しい作業の一つであったが、GISはいろいろな試みを一瞬のうちに試すことができる点が魅力である。そうした場合、研究者の考古学的なセンスと経験が、どういう図を作るかを決める際に試されることになるのであろうか。後は解釈だけである。

次に歴博でDBを作る際には、是非ともGISを利用した分布図を作りたいと考えている。

最後になりましたが、本稿を草するにあたり、発表の機会を与えてくださいました国際日本文化研究センターの宇野隆夫先生、私からの無理難題を次々に図にし



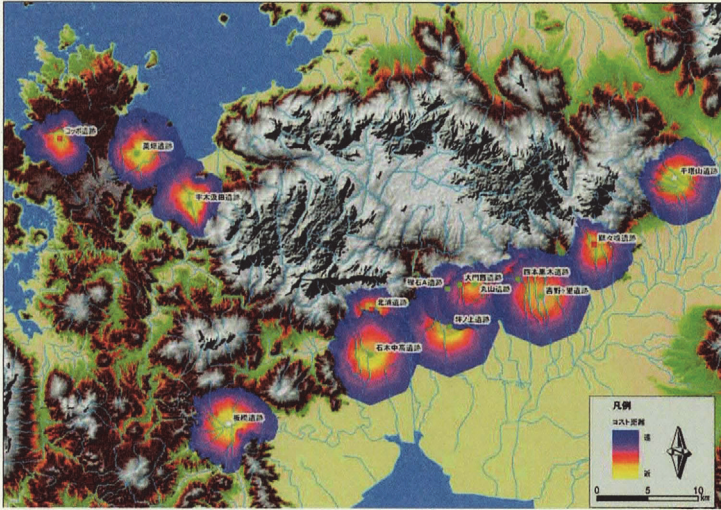


図4 コスト距離

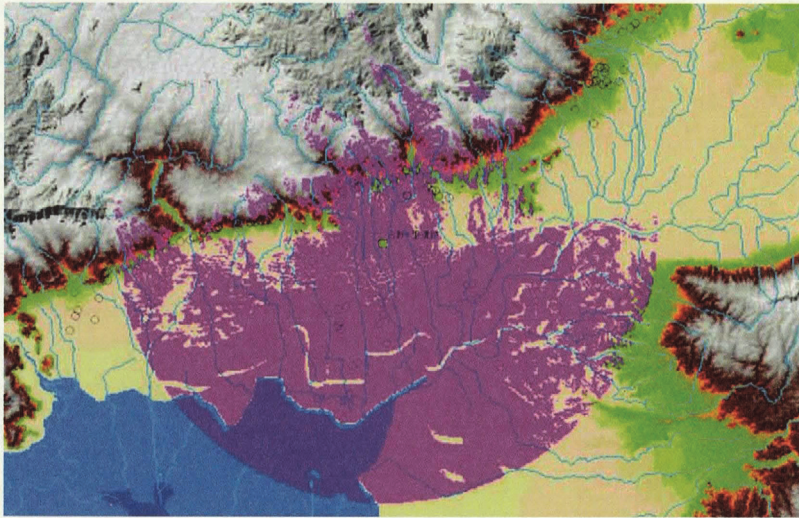


図5 吉野ヶ里遺跡から見える範囲（望楼上：5 m）

てくれた中央大学大学院の山口欧志さん、17年前に元になる遺跡カードを作ってくれた榎原考古学研究所の川上洋一さん、福岡県教育委員会の重藤輝行さん、佐賀県教育委員会の渋谷格さん、埼玉大学の高久健二さんに記して感謝の意を表します。